

初めて訪ねた『方正地区日本人公墓』

芹沢 昇雄

昨年（2010年）6月、私たち『撫順の奇蹟を受け継ぐ会』は日中友好協会、紫金草合唱団、中国山地教育を支援する会を含め100名程の団を組み『撫順戦犯管理所60周年式典』に参加してきました。

ご存じの方も多いかと思いますが、戦後シベリアに捕虜として収容された元兵士60万人の中から、969名が1950年に旧ソ連から独立後の中国に「戦犯」として引き渡され、「撫順戦犯管理所」に収容されました。もともと此処は中国人を収容するために日本が建てた監獄で溥儀も此処に収容されていました。

収容された彼らは主に59師団で戦時中に、殺し尽くし、焼き尽くし、奪い尽くしの所謂「三光作戦」処か、強姦や生体解剖、中国人の強制連行や人間地雷探知機に使うなど、聖戦、討伐の名の下にあらゆる虐殺加害を行って来ました。

しかし、周恩来は「制裁や復習では憎しみの連鎖は切れない。20年後には解る」と彼らに一切の制裁も復習もなく、暴力も罵倒もしてはならないと徹底しました。彼らは当初「なぜ俺たちが戦犯！」と反抗していましたが、中国人が一日2食のコウリャン飯しか食べられない状況の中で、戦犯たちには白米を食べさせ肉野菜を十分与えられました。

しかし、それでも彼らは余ったご飯を捨てたり、余りのご飯をこねて囲碁や麻雀牌などを作り遊んでいても「考えて下さい」と言われるだけでした。

そんな中で彼らは徐々に過去を振り返り「認罪」を深め鬼から人間に戻り、56年の特別軍事法廷で45人を除き「起訴免除」とされ帰国を許されました。判決には一人の無期も死刑もなく、起訴された45人もシベリアと管理所の収容期間を刑期に参入され満期前に帰国を許されました。

彼らは帰国後「中国帰還者連絡会（中帰連）」を組織し、高齢のため2002年の解散まで自らの体験や加害を証言しながら反戦平和と日中友好を訴え続けました。私たち「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」はその意志を受け継ぎ運動しております。

前置きが長くなりました。

今回、私達の目的はその「戦犯管理所」の式典参加ですが、平頂山惨案記念館、ハルピン731も訪ね、また今回は皆様が交流を深めている「方正地区日本人公墓」の訪問も計画に入れました。

以前からその存在は承知しておりましたが、私が訪ねるのは初めてで731に行くな

ら方正の「日本人公墓」もセットで見るべきと思い実現した次第です。

私たちは「撫順戦犯管理所」と「中帰連」に拘って平和運動を続けておりますが、管理所の近くに加害の現場の「平頂山惨案記念館」が在ることはご承知の通りで、必ずこの双方を訪ねております。

同様に加害の現場である731を訪ねたら、その対比として赦しの「方正地区日本人公墓」を訪ねるべきだと思っています。農民の命である農地を奪った憎き日本人開拓民のために、国交回復前のまだ貧しかった中国の皆さんがどんなにか苦勞され、あの「日本人公墓」を建てて下さったかことか日本人は知る義務があります。

その「中日友好園林」は柵に囲まれ綺麗に整備管理されていましたが、現地の皆様に心からの感謝を申し上げる思いでした。私達は同行者の一人である僧侶に読経をあげて戴き、花とお線香を手向け全員で黙禱を捧げました。文革時代には破壊されそうになり、周恩来の「同じ戦争の犠牲者」との言葉と現地の皆様の努力で破壊されず済んだとのことにも感謝でいっぱいです。

開拓団の皆様はこんな遠い所でどんなにか辛く悲しかった事かと思えます。まさに開拓民も周恩来の言う通り「日本軍国主義者の犠牲」だったのです。隣には集団自決の「麻山地区日本人公墓」が、そして、開拓民を大事にして遺児を育てて下さった「中国養父母公墓」も在り、更に戦後、現地で稲作指導に当たり収穫を倍増させ現地で神様の様に尊敬されていた、岩手県沢内村出身の「藤原長作記念碑」とその展示館も在りました。

此処は正に日中友好の場であり撫順戦犯管理所と共に日本人加害者への『赦し』の原点の場であると思えます。ハルビン市街から約180キロ、731から「立寄る」という距離ではありませんが、皆さん「行って良かった！」と言っていました。

参加者の中には羽田澄子監督の『嗚呼満蒙開拓団』を観た人もいましたが、ここに来て初めてこの事実を知った人も少なくなく、皆さん心から感動していました。私達もこの「方正」の過去を知ってもらおう努力をしたいと思えます。

過日、在中日本大使も現地を訪れたとの事でしたが、あの低い高速道路の通過は日本政府の援助で「バス」が通れるようにして欲しいものです。

此からも隣国の中国との「友好親善」に少しでも努力を続けたいと思っています。

今後とも宜しく願い申し上げます。

(せりざわ・のぶお：撫順の奇蹟を受け継ぐ会・事務局次長、NPO・中帰連平和記念館・事務局)